# 客居偶録

北村透谷

## 其一　旅心

暫らく都門熱鬧（ねったう）の地を離れて、身を閑寂たる漁村に投ず。これ風流韻事（ゐんじ）の旅にあらず。自から素性を養ひて、心神の快を取らんとてなり。わが生、素（も）と虚弱、加ふるに少歳、生を軽うして身を傷（やぶ）りてより、功名念絶えて唯だ好む所に従ふを事とす。不幸にして籍を文園に投じ、猜忌（さいき）の境に身を挿めり。斯の如きは素願にあらず、希（ねがは）くは名もなく誉もなき村人の中に交りて、わが「真村」をその幽囚より救はんか。

## 其二　夏休

天の炎暑を司（つかさど）る、必らずしも人を苦しむるのみにあらず。居常唯だ書籍に埋もれ、味なき哲理に身を呑まれて、徒（いたづ）らに遠路に喘（あへ）ぐものをして、忽焉（こつえん）、造化の秘蔵の巻に向ひ不可思議の妙理を豁破（くわつぱ）せしむるもの、夏の休息あればなり。学校より帰る人は、久しく疎遠なりし父兄の情を温め、官省の職務より離るゝものは、家を携へて適好の閑を消す、斯くの如きは夏の恩恵なり。ひとり文界の浪士のみ之を占むるにあらず、無名の詩人、無文の歌客、こゝやかしこにさまよふめり。

## 其三　村家

わが来り投ぜしところは、都門を離るゝ事遠からずと雖（いへども）、又た以て幽栖（いうせい）の情を語るに足るべし。これ唯だ海辺の一漁村、人烟稀にして家少なく、数屋の茅檐（ばうえん）、燕来往し、一匹の小犬全里を護る。濤声松林を洩れて襲ひ、海風清砂を渡つて来る。童子の背は渋を引きたる紙の如く黒く、少娘の嬌は半躰を裸（あ）らわして外出するによりて損せず。雄鶏昼鳴いて村叟の眠を覚さず、野雀軒に戯れて児童の之を追ふものなし。前家に

碓舂（たいしょう）の音を聴き、後屋に捉績（そくせき）の響を聞く。人朴にして笑語高く、食足りて歓楽多し。都城繁労の人を羨（うらや）む勿（なか）れ、人間縦心（しょうしん）の境は爾（なんぢ）にあり。

## 其四　暁起

一鴉鳴き過ぎて、何心ぞ、我を攪破（かうは）する。忽（たちま）ち悟る人間十年の事、都（す）べて非なるを。指を屈すれば友輩幾個白骨に化し、壮歳久しく停まらざらんとす。逝（ゆ）く者は逐ふ可からず。来る者は未だ頼み難し。友を憶へば零落の人、親を思へば遠境にあり。寝を出て襟を正し

て端然として坐す。この身功名の為に生れず、又た濃情の為に生れず、筆硯を顧みて暫らく撫然たり。

## 其五　乞食

天の人に対する何ぞ厚薄あらん。富めるもの驕(おご)る可からず、貧しきもの何ぞ自ら愧(は)づるを須(もち)ひん。額上の汗は天与の黄金、一粒の米は之れ一粒の玉、何ぞ金殿玉楼の人を羨まむ。唯だ憫(あは)れむべきは食を乞ふの人。天の彼を罰するか、彼の自ら罰するか、韓郎の古事、世に期し難く、靖節(せいせつ)の幽意、人の悟ることなし。

　夕陽西に傾いて戸々の炊烟（すゐえん）漸く上るの時、一群の村童、奇異の旅客を纏（まと）ふて来る。只だ見る粗造の木車一輛、之を挽（ひ）くものは五十に余れる老爺、之に乗るものは、十歳ばかりも他に増さるべし、乗るものは小鼓を打つて題目を誦し、挽くものは家に就いて喜捨を仰ぐ。髪は霜に打たれし蓬（よもぎ）の如く、衣は垢に塗（まみ）れて臭気高し。われは爾時、晩食を喫了して戸外に出で、涼を納（い）れて散策す。此の躰を見て惆悵（ちうちやう）として去る能はず、熟視すれば乗者の衣は三紋の、あはれ昔時を忍ぶ会津武士、脚は破衣を脱して露（あら）はるゝところ銃創を印し、眼は空しく開けども明を見ず。側目して両者を視れば、むか

しながらの義は堅く、主の車を推して主の食を乞ひ、はる〴〵と西国の霊場に詣づるものと覚えたり。吁、当年豪雄の戦士、官軍を悩まし奥州の気運を支へたりし快男子、今は即ち落魄して主従唯だ二個、異境に彷徨して漁童の嘲罵に遭ふ。然も主は僕を捨てず、僕は主を離れず、木車一輛、山海を越えて百里の外に旅す。讃むべきかな会津武士、この気節を以て而して斯の如し、深く人間を学ぶに堪えたり。蟬羽子悄然として立つこと少時、渠を招きて与に車を推し、之を小亭に引きて飯を命じ、鮮魚を宰して食はしめ、未だ言を交ゆる事多からず、其の旧事を回想せしめん事を恐

るればなり。われ先づ去る、去る時語なく、無限の情あり。

## 其六　海浴

酒にあらず、色にあらず、人生憂を鎖するの途、豈(あに)少なからんや。炎熱焦(や)くが如く樹葉皆な下垂するの時、海に下りて衣を脱すれば涼気先づ来る。浪高く小砂を転じ、忽(たちま)ち捲いて忽ち落つ、之れを見て快意そゞろに生じ、身を飜(ひるがへ)して浪上にのぼれば、自から虚舟の思あり。手を抜いて躰を進むるに心甚だ壮なり。濤声う

しろに響いて気更に昂り、疲倦するまで還るを忘る。惜しいかな旅嚢（りよなう）バイロンの詩集を携へず、その游泳の歌をこの浪上に吟ずるを得ざるを。

## 其七　初月

黄昏（たそがれ）家を出で、暫らく水際に歩して還（ま）た田辺に迷ふ。螢火漸く薄くして稲苗将（まさ）に長ぜんとす。涼風葉を揺（うご）かして湲水（くわんすゐ）音を和し、村歌起るところに機杼（きじよ）を聴く。初月楚々として西天に懸り、群星更に光甚を争ふ。夐（はるか）に濤声を聴くは楽を奏するを疑ひ、仰いで天上を

視れば画を展(の)ぶるが如し。歩々人境を離れて天景に赴く、人間(じんかん)この味あり、曷(いづく)んぞ促々(そくそく)として功名の奴とならむ。

## 其八　憶友

都を出る時、友ありて病に臥す。彼は堅実の一学生、学成りて躰茲(こゝ)に弱し、病を得て数月未だ愈(い)ゆるに及ばず、痩癈(そうはい)せば遂に如何(いかん)。われ尤も之を憶ふ。

都を出る時、遠く西方に旅する友と約するあり、東海道の某地をトして相会見せんとす、期する日は明後、

彼は西より来り、我は東よりせん、相見る時、情奈何（いかん）。われ尤も之を憶ふ。

之を憶ふに、一は悲しく、一は楽し、「悲楽」本来何者ぞ。縦（ほしいまゝ）に我が心胸に鑿入（さくにふ）して、わが「意志」の命を仰がず。

## 其九　晩食

詩客元来淡菜を愛す。酢味糟（すみそ）あらば、と吟じたる俳客の意、自から分明なり。爰（こゝ）に鮮魚あり、又た鮮蔬（せんそ）あり、都城の豊肉何ぞ思ひ願ふことを要せむ。市ケ谷の

詩人、今如何。「三籟」紙面の趣味、之を此の清淡に比して如何。

## 其十　漁獲

今朝、漁師急馳して海に出で、村嫗(そんあう)囂々(がう〳〵)として漁獲を論ず。午(ひる)を過ぐる頃、先づ回(かへ)るの船は吉報を齎(もた)らし来る。之に次ぐものは鰹魚を積んで帰り、村中の老弱海浜に鳩(あつ)まる。此日は之れ当年第一の夏漁、頓(やが)て見る村童頻々として来往し、人々一尾を携へざるなく、家々鮮肉を味はざるなし。漁家にあらざるもの僅かに三戸、

而して村情隣を捨てず、価なくして亦た挙家の鼓腹あり。全邑（ぜんいふ）今日鮮魚に飽く、之を東都の平等先生に告げて、与にこの歓喜の情を讃めなば、如何にぞや。

## 其十一　言語

村家に就きて言語を査するに、親子兄弟一様なる語調あり。われは平生、我が国語の自から階級的なるを厭ふもの。之を思ひて私（ひそ）かに悟るところあり。

## 其十二　蟬声

ゆふべの風に先（さきだ）ちて簾（すだれ）を越え来るものは、ひぐらしの声、寂々として心神を蕩（とか）す、之を聴く時自（おのづ）から山あり、自から水あり。家にありて自から景致の裡にあり。団扇（うちは）を握つて窗前（さうぜん）に出れば、既に声を収めて他方に飛べり。

（明治二十六年七月）

底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」
筑摩書房
1969（昭和44）年6月5日初版第1刷発行
1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行
初出：「評論　九號」女學雜誌社
1893（明治26）年7月29日
入力：kamille
校正：門田裕志、小林繁雄
2005年10月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。